様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　３月３１日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２０５６３
研究課題名（和文）　日本史学の国際的環境に関する基礎的研究
—戦前イェール大学を対象として—
研究課題名（英文）　Basic Research about International Circumstances of Japanese Historical Studies: A Survey of Yale University in Prewar Days

研究代表者
河西　英通（KAWANISHI HIDEMICHI）
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：４０１７７７１２

研究成果の概要（和文）：戦前の日本史研究における時代性と交流性を国際的な視野のもとで再検討するために、アメリカ・イェール大学のＥ．ハンチントン（Huntington）と朝河貫一に視点を置き、彼らと日本人歴史家との関係について往復書簡を中心に分析した。また同時代の原勝郎（京都帝国大学）に注目して、彼の歴史研究が国際的な学術動向の所産であったことを論じた。総論として、歴史学者と地理学者との学術交流に注目することを通して、近代における人文学総体の形成過程を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Analyzing many letters between researchers (E.Huntington, Kan-ichi Asakawa) and Japanese historians leads the re-examination of the characteristics and interchanges at the time. After investigation about the works of Katsuro Hara, they are influenced by international studies. As the result, the relations between History and Geography are very important for making Humanity in the modern era.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	900,000	270,000	1,170,000
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：日本史学、国際的環境、イェール大学

１．研究開始当初の背景

（１）本研究は、近代における日本史学の形成過程を国際的文脈のなかで再検討することを目的とした。従来の日本史学史はおおむね日本人による日本史研究を中心に、一国主義的な学説整理に終始してきた嫌いがあった。しかし、外国人、とくにアメリカ人による日本史研究が日本人研究者に与えた影響は、1960 年代の近代化論以降、大きくなっている。近年は天皇制研究から地域史研究に至るまで、あらゆるレベルでアメリカ人研究者の進出はめざましく、個別研究はもとより、代表的な講座・シリーズの編者・執筆者の日本人「純血主義」はすでに過去のものになっている。

（２）にもかかわらず、日本史学を回顧する文献はほとんど日本人研究者に対象を限定しているのが現状である。また、外国人研究者の日本史研究に対する個々の評価はあるものの、同時代的共時的な研究構造を論じているものは見あたらない。たとえば、地理学において、石田寛編『外国人による日本地域研究の軌跡』（古今書院、1985 年）が地理学研究の多国籍性を整理しているのに対して、日本史学の国際的環境に関する研究はかなり立ち遅れているといわざるをえない。

（３）こうした点に関連して、これまで『近代日本の地域思想』(窓社、1996 年)、『近代日本形成期における「東北論」の基礎的研究』(1998～2000 年度文部省科学研究費補助金・基盤研究（C）（２）研究成果報告書、2001 年)、『東北―つくられた異境』（中公新書、2001 年)、『続・東北―異境と原境のあいだ』（中公新書、2007 年）を刊行し、日本史および日本史学における東北の位置について検討してきた。

（４）さらに、日米間の研究交流に関して、2005 年度文部科学省海外先進教育研究プログラム：研究課題「地域史研究の方法論に関する国際的比較検討」（プリンストン大学東アジア学科）を行い、2005 年７月にその一環として、イェール大学で本研究の予備調査を進めた。また編著書『ローカルヒストリーからグローバルヒストリー―多文化の歴史学と地域史―』（岩田書院、2005 年）を刊行し、地域史研究という方法論に立って、いかに日米双方の研究者が日本史を「共有」できるかという試みを行い、地域史研究のもとにおける日米研究者の「平等」性を確認した。この作業は、齋藤博・来新夏編『日中地方史誌の比較研究』(学文社、1995 年)などに連なる国際研究である。今後、こうした共同研究をはじめ、相互の研究成果の積極的な翻訳作業などが進み、日本史研究をめぐる共存状態がますます深まることが求められている。

２．研究の目的

（１）日本史研究の国際化・グローバル化はなにも今日に始まったことではない。そもそも、「日本史中世史」で東京帝国大学から学位を取得した原勝郎が、赴任した京都帝国大学で西洋史を担当したことに象徴されるように、近代実証史学の影響のもとで形成された日本史学は、「国史」というよりは、むしろ広く「歴史学」として存在・開放されていたといえる。本研究の第一の目的は、草創期の日本史学を形成し、その後の学的展開に影響を及ぼした国際的環境を明らかにすることにある。

（２）第二の目的は、歴史研究における分析単位として、国家・民族ではなく、地域を設定しようとする点である。ハンチントンの著書『気候と文明』（1915 年、原題は *Civilization and Climate*）は文明論的地理学の分析単位として国家内のさまざまな地域を挙げていた。また、原勝郎の場合は東北、朝河貫一の場合は入来文書の研究に明らかなように、九州（薩摩）というように、日本史研究の基点として地域空間が重視されていた。ナショナルなサイズを自明視するのではなく、リージョナルなサイズから日本史像を立ち上げるのである。

（３）第三の目的は、原勝郎の東北史理解の背景を探ることである。1915 年に岩手県平泉でおこなった講演「日本史上の奥州」は平泉史研究にとって画期的なものであったが、その背景には同時代に於ける国際的な地理学研究が存在していた。彼の東北史理解および日本史理解の構想が、国際的学問状況のなかで構築され

ていたことを考えるならば、原が活躍した 20 世紀初頭以降の日本史学の形成過程を世界史的同時代史的な環境のもとで再論する必要がある。

３．研究の方法

（１）原勝郎の中世史研究・東北史研究に及ぼしたイェール大学の地理学者ハンチントンのインパクトの意味を分析することを糸口としながら、同時代のイェール大学に在職していた日本人歴史学者朝河貫一やハンチントンと交流があった多くの日本人研究者によって作られていた国際的学際的なネットワークの姿を、往復書簡の分析を通して行った。

（２）研究１年目：イェール大学スターリング記念図書館所蔵のハンチントン文書の調査収集を行った。また、ハンチントンが世界の文明と気候の相関関係を論じた『気候と文明』の執筆・翻訳過程を原との交流を中心に考察し、原における「日本中世史」概念および「東北」概念の形成過程を明らかにした。

（３）研究２年目：イェール大学スターリング記念図書館所蔵〔複写本は早稲田大学アジア太平洋研究センター所蔵〕および福島県立図書館所蔵の朝河貫一文書の調査収集を行った。また、朝河の中世史研究が原をはじめとする同時代の日本人研究者にどのような影響を与えたかを考察した。

(4) 研究３年目：京都大学文書館所蔵の原勝郎関係資料および千葉県立大多喜高等学校所蔵の露崎厚関係資料の調査収集を行った。また、露崎厚の遺族からも資料提供を受け、在野の地理学者のキャリア形成過程についても考察した。

(5) その他、研究各年を通じて、戦前日本史学の動向について広島大学附属図書館において文献調査を進めた。

４．研究成果

（１）現在判明している朝河貫一と日本人歴史家の往復書簡105通すべてを翻刻した。

（２）地理学者ハンチントンと歴史学者原勝郎の学術的交流について分析した。

（３）ハンチントンと交流した無名の中学校教員（露崎厚）について調査し、両者の関係を通じて、戦前日本社会における日米関係の一コマを考察した。

（４）戦前日本史学の国際的環境を検討することで、日本史学が広く世界的研究動向のなかで置かれていたこと、隣接学問、とくに地理学との共存性を通して開放された学問であったことが確認された。

（５）全研究成果は、『日本史学の国際的環境に関する基礎的研究―戦前イェール大学を対象として―』にまとめた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 河西英通、その先の東北論、歴史地理教育、査読無、第 745 号、2009、pp. 74－79

② 河西英通、戦前日本史学の国際環境（２）、比較日本文化学研究、査読無、第 2 号、2009、pp. 48－90

③ 河西英通、津軽という郷土、国文学、査読無、第 53 巻第 10 号、2008、pp. 58－66

④ 河西英通、戦前日本史学の国際環境、比較日本文化学研究、査読無、第 1 号、2008、pp. 53－127

〔学会発表〕（計３件）

① 河西英通、戦前日本史学をめぐる国際的・学際的環境、近現代史サマーセミナー、2009 年 9 月 5 日、山口市・お多福旅館

② 河西英通、「東北」への道、広島近世近代史研究会、2009 年 1 月 31 日、広島市・広島県立文書館

③ 河西英通、戦前日本史学の国際環境、朝河貫一研究会、2008 年 10 月 4 日、東京都・早稲田大学総合学術情報センター

〔図書〕（計３件）

① 河西英通、日本史学の国際的環境に関する基礎的研究、2010、p. 257

② 河西英通、他、清文堂、周辺史から全体史へ、2009、pp.288－322

③ 河西英通、他、協同出版、地域と地理教育、2007、pp.317－327

５．研究組織

(1)研究代表者
河西　英通（KAWANISHI HIDEMICHI）
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：４０１７７７１２

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：